

Hib (ヒブ) 感染症の予防接種を受けましょう

<対象者>

生後2ヵ月から60ヵ月に至るまで(5歳となる日の前日まで)の間にある児 ※沖縄市に住民登録をしている方

<接種スケジュール>

接種回数:最大4回 ※接種開始時や接種日当日の月齢・年齢により、接種回数と間隔が異なりますので、事前によく確認してから接種を受けましょう!

接種開始月齢	接種回数と間隔
生後2ヵ月～ 生後6ヵ月	初回接種： <u>27日以上</u> （標準的には27日から56日まで）の間隔をおいて 3回 追加接種： <u>初回接種終了後、7ヵ月以上</u> （標準的には7ヵ月から13ヵ月まで）の間隔をおいて 1回 ※ただし、 <u>初回2回目・3回目の接種は1歳になる前までに行うこととし、それを超えた場合は行わないこと</u> 。この場合、追加接種は可能であるが、初回接種の最後の注射終了後、 <u>27日以上の間隔をおいて1回</u> 行うこと。
生後7ヵ月～ 生後11ヵ月	初回接種： <u>27日以上</u> （標準的には27日から56日まで）の間隔をおいて 2回 追加接種： <u>初回接種終了後、7ヵ月以上</u> （標準的には7ヵ月から13ヵ月まで）の間隔をおいて 1回 ※ただし、 <u>初回2回目の接種は1歳になる前までに行うこととし、それを超えた場合は行わないこと</u> 。この場合、追加接種は可能であるが、初回接種の最後の注射終了後、 <u>27日以上の間隔をおいて1回</u> 行うこと。
1～4歳	<u>1回のみ</u>



ヒブ感染症について

ヒブ (Hib: Haemophilus influenzae type b) は、主に子どもの鼻やのどの粘膜に感染・定着しますが、そのまま何の症状も引き起こさずにいることも多い細菌です。毎年冬に流行するインフルエンザウイルスと名前が似ていますが、まったく別のものです。

何かのきっかけでこの常在菌が脳やせき髄を包む髄膜、肺や血液などに入りこむと、命にかかわる重い感染症（細菌性髄膜炎、敗血症、肺炎、化膿性の関節炎、蜂巣炎、骨髄炎など）の原因となる場合があります。

また急性喉頭蓋炎もヒブにより起こる重篤な疾患ですが、呼吸困難を伴い窒息から死亡に至る場合もあります。

ヒブは、のどや鼻の奥にすみついている身近な菌のため、だれでも重い感染症にかかる可能性があります。ワクチン接種によりHibが血液や髄液から検出されるような重篤なヒブ感染症にかかるリスクを95%以上減らすことができると報告されています。

細菌性髄膜炎について

ヒブによる細菌性髄膜炎の患者は5歳未満で多くみられます。発熱・頭痛・嘔吐が3大症状ですが、初期は発熱や嘔吐など風邪や胃腸炎の症状とよく似ていて、特徴的な症状はみられません。

新生児や乳児では発熱以外の症状として不機嫌、食欲(哺乳力)の低下が目立つことがあります。年齢が低いほどはっきりとした症状がないため、判断が難しいと言われています。症状が悪化し、高熱やけいれん、意識障害が出て初めて診断がつくことが多く、早期の診断が大変難しい病気です。

細菌性髄膜炎の原因となる細菌(起因菌)はいくつかありますが、多くはHibと肺炎球菌が原因と言われています。

最近では、抗菌薬に対する耐性菌が増えており、治療が難しくなっているといわれています。

ヒブによる髄膜炎は化学療法を行ったとしても予後不良になる場合が多く、致命率は5%、てんかん、難聴、発育障害等の後遺症が約25%に残るといわれています。

○ヒブワクチンの副反応

注射部位の赤み、はれ、しこり、痛みや発熱、不機嫌、食欲不振などで、これらは通常数日以内に自然に治ります。まれに重い副反応として、ショック、アナフィラキシー(じんましん、呼吸困難、血管浮腫、顔面浮腫、喉頭浮腫等)、けいれん(熱性けいれん含む)、血小板減少性紫斑病などが報告されています。

○予防接種による健康被害救済制度について

定期的予防接種後に起きた健康被害が、予防接種によるものと国で認定された場合には、予防接種法に基づく補償(医療費、医療手当、障害児養育年金、障害年金、死亡一時金、葬祭料など)を受けることができます。

沖縄市役所 こども相談・健康課 予防係 TEL 939-1212(内線 2232・2233)

※この説明書の情報は令和2年3月現在のものです。

